

やすらげき世を求めて

〈天皇陛下が靖国参拝できる日本へ〉

しみず たかし
清水 崇史

(しがく総合研究所)

終戦から80年を迎えた。昭和天皇は、国民の命

を救うためにみずから命を賭して終戦の決断を下し、戦後も全国を巡幸して国民を励まし続けられた。その覚悟と行動が日本の終戦と復興の原動力となったのである。しかし、昭和天皇が願われた「やすらげき世」に、いまの日本は近づけていないのだろうか。天皇陛下が靖国神社に参拝できない現状を見つめ直し、日本人としていかにあるべきかを考えたい。

命をかけて戦争を止めた昭和天皇

1945年当時、日本は「このままでは破滅する」というほど追い詰められていた。もともと自衛のためにやむを得ず始めた戦争も、エネルギー不足や資源難の中で3年以上が経過し、日本にはもはや戦争を継続する力は残されていなかった。しかし、連合国からは「国体（天皇を中心にしたまる日本独自の国柄）」の保証が得られず、終戦の命がけのご聖断こそ、日本と国民の未来を守った歴史的な瞬間であった。

なお、会議で最も戦争継続を主張した阿南も、実は昭和天皇の意向を汲み、あえて自分が「悪役」を演じることで軍部の暴走を抑えようとしたといわれている。昭和天皇は後に「終戦は鈴木、（中略）阿南と皆私の気持をよく理解して」くれたと語っている（『昭和天皇拝聴記2』より）。

戦後復興と「やすらげき世」への祈り

終戦後、昭和天皇は「全国を隈なく歩いて、国民を慰め、励まし、また復興のために立ちあがらせるための勇気を与えることが自分の責任とおもう」と、全国巡幸を始められた。占領軍は「敗戦の苦しみにあえぐ国民が天皇に石でも投げて權威が地に落ちればよい」と考え巡幸を許可したが、そ

の決断は極めて困難なものであった。総力戦に敗れたドイツやイタリア、オーストリアでは王朝が滅びており、「敗戦すれば皇室も消滅するのではないか」と考えられていた。

鈴木貫太郎首相は、昭和天皇の願いである終戦を決着させる覚悟を決め、8月9日に御前会議を開催する。そこでは、阿南惟幾陸軍大臣をはじめとした戦争継続派3名と、ポツダム宣言受諾派3名で意見が2つに分かれる。もしここで鈴木が意見述べて、4対3で結論をだしても戦争は止まらないだろう。陸軍によるクーデターが必至であった。

そこで鈴木は、昭和天皇に「ご聖断を仰ぐ」という禁じ手にでる。昭和天皇は「戦争を継続しようとする軍人の気持ちもよくわかる。しかし、たとえ自分がどうなるうとも、国民の命を救いたい」との強い決意を表明し、終戦が決定した。こ

の予想に反し、国民は昭和天皇を熱狂的に迎えた。

「戦災の国民のことを考えればなんでもない。10日間くらい風呂に入らなくても構わぬ」と語り、汽車の中や学校の教室で寝泊まりしながら、過酷な旅を続けられた昭和天皇。その姿を目にした多くの人が「日本は必ず立ち上がれる」と感じ、復興への希望を抱いた。昭和天皇の「身を粉にした行動」は、日本再建の原動力となったのである。

1956年には「もはや戦後ではない」という言葉が経済白書に記され、日本は高度経済成長を遂げた。しかし、昭和天皇は国民の苦しみ寄り添い続けた。亡くなる前年の終戦記念日に詠まれた御製が、昭和天皇の変わらぬ祈りを象徴している。

やすらげき 世を祈りしも いまだならず
くやくももあるか きざしみゆれど

11月を最後に天皇の参拝は途絶えている。その背景には、同年8月15日の三木武夫首相による靖国参拝が「憲法の政教分離原則に反する」として政治問題化し、それが天皇陛下の参拝にまで「飛び火」してしまったからである。日本国民統合の象徴である天皇は、政治的な争点となっている神事に、参拝することはできないのである。

この点において、近年、特に影響が大きかったのは安倍晋三元総理の対応である。彼は2013年12月、現職首相として靖国神社に参拝したが、その後、対外関係や国内の反発を考慮し、在任中は参拝を避け続けた。そして退任直後に靖国神社を参拝したのである。この行動は、「最も愛国心を持っているとされ、安倍一強」とまで呼ばれた強い首相ですら現職中は参拝できないのだから、他の現職首相が参拝しなくても仕方がない」とい

昭和天皇が「いまだやすらげき世はなっていない」とおっしゃったのは、戦争で家族を失った人々の悲しみや、戦没者への慰霊が十分に果たせていないことへの悔いであったと考えられる。

この思いは、上皇陛下や今上陛下にも受け継がれている。サイパンやパラオなど、かつての激戦地を訪ねて慰霊と平和への祈りを捧げられ、戦後80年の今年も、天皇皇后両陛下は硫黄島や沖縄、広島を訪問されている。

天皇陛下が靖国に行けないという異常さ

しかし、現代の日本には深刻な問題が存在する。それは「天皇陛下が靖国神社に参拝できない」という現実である。

昭和天皇は戦前・戦中に20回、戦後にも8回、靖国神社に参拝されてきた。しかし、1975年う最悪の前例を作ってしまったと言わざるを得ない。事実、安倍政権以降、現職総理大臣による靖国参拝は途絶えたままである。

果たして、国のために命を捧げた英霊を慰霊する神社が「行けない場所」となっていて良いのだろうか。国を守るために命をかけた方々への感謝や慰霊の気持ちこそ、タブー視してしまう現状は、決して正常ではない。

今上陛下が靖国参拝されたのは1969年12月11日、まだ学習院初等科にご在学中で、皇太子にもなっておられなかった時代である。陛下が靖国神社に堂々と参拝できる日を迎えることが、昭和天皇が望まれた「やすらげき世」に近づく第一歩となるだろう。そのためには、国民一人ひとりが歴史を学び、英霊への慰霊と感謝を国民全体で分かち合えることが大切だ。私たちの判断と行動が問われている。

